

緑爽会会報 No. 163

2019年8月26日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～ 《報告》 ～～～

6月山行報告「山研に泊まって上高地を散策」

実施日：6月26日（水）～27日（木）

参加者：9名（田村佐喜子、渡部温子、鳥橋祥子、富澤克禮、夏原寿一、川口章子、渡邊貞信、
荒井正人、加藤真美）

上高地の山研に泊まる山行の話が持ち上がったのは、昨年秋、森会員に講演していただいた後の懇親の場であった。しかし残念ながら森会員は都合が悪く、また小泉会員も当日体調不良で参加できなかった。初日は良い天気であったが、翌日は雨で明け、岳沢へ登るプランは中止とした。三々五々帰路につく形となったのが少し残念であった。

松本での買い出しを済ませてバスターミナルに着くと残雪の穂高が迎えてくれた。川口さんを料理長に女性陣は夕食の準備。申し訳なかったが男性陣は周辺散策。夕方まで穂高が良く見えていた。

夕食前に田村さんのお話を聴く。冒頭夏原さんから以前の島々駅について興味ある話があった。それは、

1966年までの終点「島々駅」が手狭になり手前の「赤松駅」を「新島々」としたこと、その駅舎は大正時代の味わいある建築で、今の駅の国道を挟んだ向かいに移築し地元の物産店としたこと、などである。ただ今回夏原さんはいつものように奥様から頼まれた買い物をすべく行ってみると、何と耐震上の問題で閉まっていた！ということであった。なお、店内に飾ってあった夏原さん撮影の写真にまつわる話が会報「山」836号「東西南北」に掲載されていますのでご一読を。



田村さんのお話

（夏原さんから昭和33年朋文堂発行の「マウンテンガイドブックシリーズ」の「上高地・槍・穂高」の写しを参考資料として提供いただきました。当時の周辺の旅館や山小屋の料金や経営者などが一覧になっています。ご要望がありましたら荒井までお申し出ください。）

○修練の上高地一信濃支部で鍛えられた

松本での登山の基礎は信大と高校が基本で、例年合宿があった。小梨平に50人テントを張って信大、深志、県（あがた）などの高校生と一緒に寝た。真ん中にストーブがあって、皆飯盒炊爨（すいさん）したものをそこで温めていた。10年くらい続いたかと思う。中には後に大学でも活躍し

た人もいる。信濃支部では西糸屋の裏で自炊して5日間の合宿があり、百瀬さんとか塚本さんに鍛えられた。霞沢に女性3人が連れていかれ、いきなりグリセードで降りろって。仲間の一人は泣き出しちゃうし。岳沢小屋の岳人（たけと）さんは確か17歳の高校生の時に入会してる。

○ウェストン祭

昭和30年になると一年おきでウェストン祭をするようになった。その後毎年開催されるようになったが、担当は西糸屋が中心だったところ、登山ブームになって5年ごとの持ち回り、さらには3年ごとの持ち回りとなった。

○人との縁

松本に住んだことで、山小屋の経営者などと親しくしていただいた。（資料に出ているような方々、またその次代の方等、びっくりするような話が沢山出てきましたが省略します）得をしたことも多い。旦那が東京に戻り一人気儘だったし、とにかく山に行きたかった。信大で働いたことも有難かったし、休みをもらうのにも学長にまず申し出をしたり結構無茶もした。山に行くにはいい環境だった。



田村さんのお話については、会報151号「常念岳に寄せて」、154号「松本に住んで、山あれこれ」も合わせてお読みください。（報告：荒井正人、写真：夏原寿一）

7月例会「暑気払い」

開催日：7月20日（土）

出席者：27名（写真参照＝撮影：小泉義彦）

天候不順と言ってもよい7月であったが、当日は少し夏らしくなった。遠方からは田村さん、お怪我から回復された西谷さんご夫妻も出席されて久々にお会いし安心したことであった。

まず最初に会報162号で紹介した渡邊会員の「南米縦断の旅」に関して、道中の苦労話やエピソード等、映像を見ながら（イグアスの滝の動画もあり）解説をしていただいた。（写真もたくさんありますがご要望があれば写真と解説をお送りします。荒井までお申し出ください）

いつも通り川口さん、渡部さんらには手作りのお料理を用意していただき、また皆さんからのお持たせ、お酒もたくさんいただきました。（欠席の吉田さんからは「越乃寒梅」をわざわざ送っていただきました。感謝です。皆さんありがとうございました）

開会后、今回入会いただいた南川さんから自己紹介とお話がありました。その後乾杯、歓談タイムとなり、例年通りお一人ずつ近況を語っていただきましたが割愛させていただきます。



緑爽会 暑気払い 2019.7.20

近藤雅幸 小林敏博 西谷可江 鳥橋祥子 山川陽一 深田森太郎 西谷隆臣 小原茂延 松本恒廣 南川全一 夏原春一 荒井正人
 石塚嘉一 藤下美穂子 川口章子 渡部温子
 渡邊貞信 田井興世 田村佐喜子 瀬戸英隆 富澤充禮 岡塚貞亨 梨羽時春 川嶋新太郎 近藤緑 鳥田稔 小泉義彦

自然保護全国集会を終えて

川口 章子

令和元年の自然保護全国集会は7月6日(土)～7日(日)、埼玉支部と共催で「埼玉県男女共同参画推進センター・セミナー室」を会場に開催した。さいたま新都心は国の官庁の一部が移転することになって平成12年に旧国鉄埼玉操車場跡地に開発された所で、会場は駅構内とテラスで繋がるさいたま新都心駅周辺の一角に建つ「ホテルブリランテ武蔵野」の3・4階の県の施設を埼玉支部のご尽力で借りることができた。

全国集会は「生物の多様性と自然保護」をメインテーマに参加者は自然保護委員会担当理事、北は北海道、南は四国の14支部の委員長、支部自然保護委員長・委員、会員ら50余名が参集した。

第1日目は松本敏夫埼玉支部長、飯田邦幸自然保護委員会担当理事の挨拶で始まり、一般社団法人埼玉県植物防疫協会事務局長・埼玉昆虫談話会会長の江村薫氏が「生物多様性と自然保護」、人間市環境アドバイザー・埼玉支部自然保護委員の中村直樹氏が「武甲山の希少野生生物」を演題に各1時間の基調講演をしてもらった。

江村氏は生物多様性を埼玉県のシンボルとなっている生物を手掛かりに考えたいと県民手帳に掲載されているミドリシジミを取り上げられた。ミドリシジミが県の蝶となったいきさつは、埼玉県は湿地性植物のハンノキが繁殖しそこにミドリシジミがいて「これが埼玉県の原風景だ」となり、埼玉県のシンボルに決められた。今も県内で多く見られる。このように生き物たちの豊かな個性とのつながりをシンボルに絞ってみることで保護を考えることができると話された。

中村氏は「山に登って花を観察して生物多様性を実践している」と武甲山の希少植物を紹介され、併せて天然記念物でもある県花のサクラソウが県木のケヤキと共存していたが、今絶滅危惧種になっているとも話された。その原因は、「荒れる荒川」の氾濫でケヤキの小枝が上流から流れてきて大木となり茂ったこと、またサクラソウは河川敷のような湿地を好む植物だが、そこに人間の手が

入ったことにある。この環境の変化を見ると保全を考える手掛かりになると話された。

基調講演の後3分科会に分かれて「生物多様性と自然保護の関わり」「絶滅危惧種の保全」「山の自然を守るためにできること」をテーマにディスカッションをした。

第2日目は前日の3分科会の報告から始まり、各地域で開催された支部活動の報告と進んで終了となった。

フィールドスタディは北本自然観察公園に各自移動して実施した。観察場所は埼玉県の「里地里山」の自然環境を残し、野生の生きものが暮らしやすいように、そして来園者が自然に親しめるようにと、公益財団法人埼玉県生態系保護協会が指定管理している公園で、約2時間参加者同士で学びあった。

昨年の石川県には緑爽会から深田会員、今年は富澤代表、松本前代表が参加してくださり心強い限りでした。これからも自然保護委員会の活動をご支援くださるようお願いいたします。

～～《寄稿/投稿》～～

緑爽会発足25年目を来年に控えて

松本 恒廣

緑爽会は1995年9月の理事会で正式に同好会として承認された。当時の理事会議事録を見ると「旧自然保護委員の経験者を中心に緑爽会が生まれ、同好会に加わった。」とある。

私が担当理事をしていた90年前後は委員の数は一時40名近くになったこともあった。その後、会長指示で各委員会とも人員削減が行われ、この機に大半の委員が退任を余儀なくされた。この時退任した人達で結成されたのが当会である。当時の村木会長宛の同好会承認願を見ると「緑爽会は名前のとおり“爽やかに、おしゃれに”を心がけながら先人の愛した美しい山と溪を次代に残すために学び、環境保全のために行動する」云々とある。

当時発足するにあたり入会勧誘された30名のうち、現在当会で健在なのは、梨羽時春、松本恒廣、近藤緑、関塚貞亨、渡部温子（会員番号順）の5人である。

このようないきさつでスタートした当会なのに、近年は自然保護に対する関心が薄らいでいるように見える。先日の埼玉での自然保護全国集會も川口、近藤雅、小林氏等が委員として出席された以外は富澤、松本の2名だけという、寂しい限りであった。担当理事や委員会メンバーとの交流の場があってもいいのではないかと思う。

ともかく来年は結成25周年を迎える。2020年に何か記憶に残るようなイベントを考えてみては如何。

戦争末期の尾瀬と上高地（前）

関塚 貞亨

長蔵小屋の平野紀子さんから昭和19年7月29日の宿泊コピーが送られてきた。そこには「三ッ沢下町 関塚貞亨 19歳 平民」と書いてある。江戸幕府が崩壊、明治新政府が成立し廃藩置県で武士は失業、現代で言えばサラリーマンが失業保険もなく収入は皆無の状態となった。新政府には金がないので武士は士族、商人や職人それに農民は平民として戸籍上は身分に上

下をつけることで武士の不満を抑えようとしたのだと思う。この戸籍上の差別は戦後に新憲法が発布されるまで続いたのだが、山小屋の宿帳にまで戸籍上の差別を記帳していたことなどはすっかり忘れていた。

太平洋戦争も2年目の昭和18年には米国の反撃が始まり、南方の島々の日本軍の玉砕が伝えられるようになって、昭和19年から兵役は20歳からとなっていたのを19歳に繰り上げることになった。私も4月に兵隊検査を受け近いうちに戦地に送られると覚悟をすることになった。戦争末期のその頃には食料の配給も滞り、衣料も物資も不足する生活が続いていて、1年前から近所の召集される人たちが、3ヶ月も経たないうちに戦死と伝えられることが多くなっていた。それは南方に送られる途中で船が沈められたためと噂されていた。私も兵隊に行ったら死ぬだろうから、死ぬ前にせめて日本の美しい山の代表「尾瀬と上高地」を見ておきたいと思ったのである。

三人だけの尾瀬ヶ原

戦時中は5万分の1地図は売っておらず、ガイドブックもなく日本山岳会が昭和18年10月に発行した戦前最後の山日記の略図と古書店で見つけた田部重治の「山と溪谷」が唯一の道しるべであった。尾瀬行きは上越線の沼田駅から大清水～三平峠を経て尾瀬沼から尾瀬ヶ原、菖蒲平から富士見峠、沼田という2泊3日の計画であった。

勤めていた日立製作所戸塚工場の同僚、長尾、岸山の三人は夜行列車で早朝の沼田駅に降り立つと、駅前の坂を登った上に木炭バスが待機していて、よたよたと鎌田まで走り、吹割の滝を横に眺めて歩き始めた。木綿の黒足袋は勿論、草鞋も貴重品でそれぞれ2足調達するのが大変だったから大清水までは裸足にちびた下駄で歩いた。

三平峠で草鞋に履き替えて夕暮れ近い峠を下ったが、湿原が見え始めたときの鮮やかな緑とニッコウキスゲの美しさはいまも臉に残って忘れられない。その頃の長蔵小屋は平屋で長英の奥さん靖子さんが一人で小屋を守っていた。食事は岩魚の塩焼きか甘露煮か全く覚えていないが、食堂に大きな灰色の羽を広げた白鳥の剥製が飾ってあり、泊り客は我々三人と画家一人だけであった。

そして大下藤次郎の石版刷りの美しい絵葉書がお土産として売っていたのが記憶に残っている。その絵葉書は戦災で焼けてしまったが、2005年に大下藤次郎の『みずえ』発刊100周年を記念して美術出版社が出版した『みずえの福音使者 大下藤次郎』を『山岳』第101年の図書紹介で執筆したのも長蔵小屋での鮮やかな絵葉書との出会いが縁であったからと思っている。

翌日我々三人は靖子さんに和船で沼尻まで送ってもらい原に向かった。沼尻からの湿原は丸太が所々欠けていて、跳び損ねて太ももの付け根まで泥炭層に潜り込むような状態だった。その湿原は昭和40年代に4度目の尾瀬訪問のときには親指で押しても跳ね返されるほど乾燥が進んでいた。東電が取水していて、自然の状態ならば原の泥炭層に行き渡るべき沼の水を横取りしているのが原因だと、宮脇横浜市大教授主宰の「尾瀬の自然を守る会」で主張したことがあったが、東電の子会社、尾瀬一帯の持ち主の尾瀬林業代表は「科学的に証明されていない」と主張して、いまや鹿が原を走り回れる様に乾燥化が進んでいる状態となっている。

戦争中の尾瀬ヶ原は燧岳側に彌四郎小屋と桧枝岐小屋の2軒、三条の滝に行く途中に東電小屋、ヨッピー川の近く温泉小屋があり、鳩待峠を降りたところに山の鼻小屋、そして菖蒲平に小さい小屋があるだけで、竜宮小屋はなかった。

旅の二日目は彌四郎小屋に泊まったか、菖蒲平の小屋に泊まったか定かでないが菖蒲平には70

歳の爺さんが一人で頑張っており、前年10月の草紅葉の頃に一高の学生が独り来ただけで、今年
は貴方がた3人が初めての客だという。我々が料理を作ろうということで爺さんに「じゃが芋と玉
ねぎがあるか」と聞くと「ある」という。長尾が持ってきた瓶詰の鯨の大和煮とカレー粉でカレー
ライスを作ったら爺さん「生まれて初めて食べた」と喜んで岩魚の干したのをお土産にくれた。

富士見峠の途中で草鞋が駄目になり、裸足にちびた下駄で歩き鎌田まで来たときに運よくトラッ
クの荷台に乗せてもらったが、沼田駅の坂上で降りて駅に駆け下りたら下駄が割れてしまった。裸
足で駅にたどり着いて上野行きに、また横浜までの最終列車にようやく間に合った。東神奈川駅か
ら三ツ沢の自宅まで1時間近くかかる。夜道を大荷物を背負って裸足で歩いて帰ったが怪しまれる
こともなく無事帰宅した。

魚沼アルプス(仮称)伐開の記録と案内

吉田 理一

全国各地には〇〇アルプスと名付けられた所謂「ご当地アルプス」が何箇所か存在する。201
0(平成22)年12月、品川プリンスホテルでの日本山岳会年次晩餐会翌日の親睦登山は「鎌倉
アルプス」で実施された。天候に恵まれ太平洋が望まれる稜線歩きは雪国育ちの私には新鮮に感じ
られた。反面、稜線近くまで開発された霊園や急斜面に無理して造成された宅地に建つ住宅には集
中豪雨による土砂災害の危険性を感じた。私の住んでいる豪雪地帯の新潟県魚沼地方では雪崩の危
険から考えられない地形での開発である。

日本アルプスは北アルプス(飛騨山脈)、中央アルプス(木曾山脈)、南アルプス(赤石山脈)の
総称である。「ご当地アルプス」にはどのようなものがあるかインターネットで調べてみると実に
ユニークなアルプスが存在する。

ネーミングにも苦勞の跡が偲ばれ名前を見ただけでも一度は歩いてみたくなるような「ご当地ア
ルプス」もある。

- ① 瀬戸内アルプス～瀬戸内海随一の景観が自慢、周防大島(山口県)
- ② 宇都宮アルプス
- ③ 湖南アルプス～琵琶湖を見下ろす
- ④ 金勝(こんぜ)アルプス～琵琶湖の南東、竜王山・鶏冠山
- ⑤ 沼津アルプス
- ⑥ 多紀アルプス～兵庫県篠山市の北、多紀連山
- ⑦ 湖西アルプス～富士山・三河湾・浜名湖の展望
- ⑧ 観海アルプス～熊本県天草

山の木一本切るのにも大変な手続きを要する今日、現地で山の所有者を丹念に探し里山を切り開
いて登山道や道標を整備して下さっている方々が作られた新しい縦走路をいつしか「魚沼アルプ
ス」と呼ぶようになった。

私自身はこの作業に一切加わっていないので詳しい伐開の記録が分からないでいた。地元の山岳
会「みちぐさ山の会・ハイキング部」の機関紙「ハイキングだより277号」(2016年10月
号)に井上信行さんが「魚沼アルプス(仮称)・新道開拓記」と題して貴重な記録を載せていただき
ましたので引用させていただきます。

『地元のHさんがコツコツと始めた、YさんとHさんが加わり3人になった。少しでも力になればと私も参加、地元の冒険好きなHさんが加わり総勢5名になった』

【伐開の記録】

- ① 桑原山(558m)
 - ・桑原山～涸沢山(633m)～トヤノ頭(671m)
2015年5月30日～10月26日
 - ・トヤノ頭～鳴倉山(579m)
2015年5月13日～6月15日
 - ・トヤノ頭～駒の頭(680m)
2015年12月21日～12月25日
 - ・駒ノ頭～黒禿山(780m)
2016年5月13日～7月31日
- ② 笠倉山水源浄水場～駒ノ頭
2016年6月18日～8月3日

【コース案】

- ① 鳴倉山ピストン ② 桑原山ピストン ③ 笠倉山ピストン
 - ④ 大力山～黒禿山～笠倉山ピストン ⑤ 鳴倉山～桑原山 縦走(及び逆コース)
 - ⑥ 桑原山～涸沢山～トヤノ頭～駒ノ頭～黒禿山～大力山縦走
 - ⑦ 鳴倉山～トヤノ頭～駒ノ頭～黒禿山～大力山縦走
- (以上ハイキング日より277号から引用)

※参考データ：当地の初雪は例年11月20日頃、積雪は平年で約2メートル超、残雪の越後三山を眺めながらの早春と全山紅葉の秋が登山に適する。トイレ・水場無し。旧湯之谷村の名の通り各登山口には公営の日帰り温泉が沢山ある。関越自動車道小出 IC(池袋⇄新潟の高速バス停)から大力山宝泉寺登山口まで徒歩可。



大力山山頂の東屋

※最東端登山口の笠倉山水源浄水場の手前300mには温泉宿泊施設「湯之谷けんぼセンター」がある。ロビーには浩宮様のご学友とお二人で平ヶ岳に登山された際に宿泊された時の写真が飾られている。

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

10月尾瀬山行：会津側から沼山峠に入り、長蔵小屋に泊まって草紅葉を楽しみます。
 日 時：10月2日（水）～3日（木） 担当：荒井正人
 集 合：浅草駅8時45分（浅草発9時の「リバティ会津111号」に乗ります。必ず事前に指定券を予約してください。）
 コース：<初日>浅草―会津高原尾瀬口（バス・尾瀬御池乗換）沼山峠→長蔵小屋（泊）
 <2日目>小屋→三平峠→一ノ瀬（バス）大清水（バス）戸倉（入浴）バス（新宿）
 歩程は初日1時間半、2日目3時間です。ただ2日目雨の時は沼山峠に戻るのが安全と考えています。この場合は新宿へ出るより時間がかかりますのでお含みおきください。

朝晩は寒いですので防寒具、雨具などご準備ください。

申込：指定券を押さえる必要がありますので、時間があまりありませんが9月1日までに荒井までご一報願います。

10月講演会：

日時・場所 10月28日（月） 18時～ 104号室

演題「日本山岳会草創期の二人…小島鳥水と岡野金次郎について 二人のお孫さんを交えて」

講師：神奈川支部 砂田定夫氏、 四国支部 小島誠氏、 渡邊貞信会員

※当講演会は会報「山」でも告知します

11月山行：11月15日（金）日原集落の見学及び日原鍾乳洞 雨天中止

紅葉真っ盛りの奥多摩を楽しみたいと思います。日原集落の見学後、約30分の歩きで、日原鍾乳洞へ。鍾乳洞付近の散策も。東京多摩支部の石井秀典氏に案内して頂きます。

集合：10：10 奥多摩駅前 日原鍾乳洞行バス停

行程：奥多摩駅発（日原鍾乳洞行バス）10：15→東日原着10：50→（日原集落歩き）森林館、日原小学校、日原ふるさと美術館等見学→（徒歩30分）→日原鍾乳洞及び石山神社、梵天岩等付近の散策→日原鍾乳洞バス停14：50→（31分）→奥多摩駅15：21着

*日原鍾乳洞バス停14：50は、16：05になることもあります。

歩行時間約3時間

通常の日帰り山行の装備（一部やや急坂あり）をお願いします。

昼食は、各自ご持参ください。

担当：富澤克禮（CL）、渡邊貞信（SL）

申込：11月7日までに富澤までご連絡ください。



*奥多摩BCでの前泊も可です。希望者は、富澤まで申し込んでください。

以下、今後の予定です。

12月 忘年会 12月21日（土） 1月 初詣山行 1月10日（金）

会員異動

・新入会員：南川金一(9475)

―― 編集後記

相変わらずの異常気象の中、天気図とにらめっこして山に出かけましたが、雨に遭うことの多い夏でした。しかも降り方が尋常ではありません。何かがおかしいと思わずにはいられません、それは人智を超えた、どうすることもできないことなのか。考えさせられます。（荒井正人）

<次号予告> 10月25日発行の主な内容・・・皆さんからの投稿をお待ちしています！

10月山行報告、寄稿：関塚さんの連載（後）など